

第XII部

「の」

第36章では「の」について考える。

- ① 「の」はA, Bという二つの実体をつなぐ機能をもつ。(36. 1)
- ② 「の」に意味はない。(36. 2)
- ③ 「の」は名詞修飾と組み合わせて使用される場合もある。(36. 3)
- ④ 後ろのBが省略されて「Aの」という形式が生まれる。(36. 4)
- ⑤ 「の」がBの存在を前提としていることから、「Aの」でもBの存在を示すことになる。(36. 5)
- ⑥ 「の」だけでBの存在を示し、形式実体「の」が生まれる。(36. 6, 7)
- ⑦ 形式実体「の」が形式包含実体へと機能を拡大する。(36. 8, 9)

第37章では「の」に関する諸話題を扱う。

「のだ基・のです基」(37. 1) / 「ので基・のに基」(37. 2)

「魚のおいしいの」の構造(37. 3) / 「カラオケに行くの巻」の構造(37. 4)

強調構文の構造(37. 5) / 「自由の女神」と「自由な女神」(37. 6)

「この・その・あの・どの」の構造(37. 7)

第36章

「の」

36.1 「の」は「実体つなぎ描写詞」……構造図では矢印

「の」は 4.2 3)で述べたように「実体つなぎ描写」をその機能としてもつ「実体つなぎ描写詞」(5.2 表5-6参照)である。図示においては、図36-1に見るように、構造上の実体と実体をつなぐ「矢印」として表示される(4.2 3))。

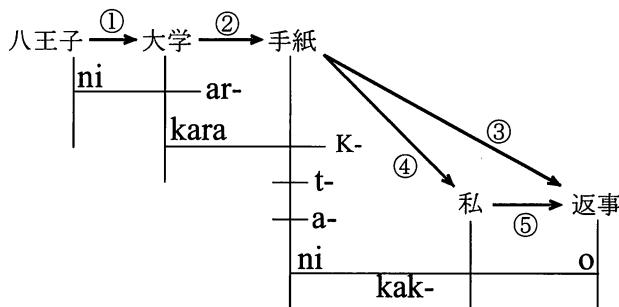


図36-1 私のは八王子にある大学から来た手紙に返事を書く

たとえば、①②③の「の」を使用すればだいぶ要領のよい描写文が作れる。

私は八王子の大学の手紙の返事を書く。
① ② ③

36.2 「の」の意味はどこから？

「の」の機能は構造を形成している実体(名詞)同士を結ぶことであるから、「の」には意味はほとんどないはずである。ところが、「の」は従来所有の意味をはじめいろいろな意味をもつと考えられていた。国語辞書にはだいた

い次のような形で「の」の意味が示されている。

- ・私の家(所有者) • この大学の学生(所属先) • パイの箱(内容物)
- ・主婦の調査(対象) • 絹のハンカチ(材料) • プロ用の道具(性質)
- ・近くの駅(場所) • 5リットルの牛乳(数量) • 来年の今日(時)
- ・看護婦の三田さん(身分)
- ・弟の通う中学校(主語)

これはどういうことなのだろう。本当に「の」にこんなに意味があるのだろうか。この文法では、たとえ「の」に意味があったとしても、それは

「の」は、結ぶ2つの名詞が1つの構造の中にあることを表すだけのものであると考えている。

では、所有だとか、所属だとかというさまざまな意味はどこから来るのだろうか。

それは構造の構成から出てくるのである。構造の構成に帰すべき意味の発現を「の」の機能であると考えたために、「の」にさまざまな意味を付与する結果となっていたのである。

「の」に意味はない。「の」だけでは意味は分からない。だから、「の」を扱うときは構造の構成を明らかにしなければならない。構成が明らかになって初めて「の」の結ぶ名詞間の関係(意味)が分かるのである。

たとえば「ドイツの本」という句がある場合、この句の意味を知るためにには、どのような構造からこの句が生まれているのかを知らねばならない。

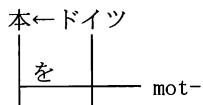


図36-2 ドイツが持つ

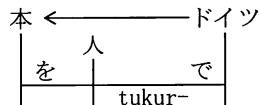


図36-3 ドイツで作る

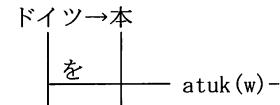


図36-4 ドイツを扱う

図36-2のように「ドイツが本を持つ」という構造から生れたのであれば「所有」の意味になるのであり(ドイツくが>の本)，図36-3のように「ドイツ

で本を作る」という構造から生まれたのであれば「生産地」の意味になり(ドイツくで>の本), 図36-4のように「本がドイツを扱う」という構造から生まれたのであれば「対象」の意味になる(ドイツくを>の本)のである。

このようなわけで、名詞についている「の」を見たら「の」の前に格を補って、構造中でのその名詞の位置を確認して扱うのがよい、というアドバイスが生まれる。

「私の家」なら「私(が)の家」(所有), 「この大学の学生」なら「この大学(に)の学生」(所属先), 「主婦の調査」なら「主婦(を)の調査」(対象), 「主婦(が)の調査」(実施者), 「看護婦の三田さん」なら「看護婦(で)の三田さん」(身分・職業)という具合である。

格を補えば、その構造をより正確にとらえることができるようになる(4.2 3)参照)からである。

当文法では、名詞を、判断構造の中で必ず何らかの格において位置をとるものとして扱う。文中にある限りは無格の名詞はありえない。

なお、「AのB」という形の描写での、Bにあたる名詞を「ノ後名詞」と呼ぶことにする。構造では「ノ後実体」である。Aにあたる名詞は「ノ前名詞」であり、かつ「ノ前実体」である。

36.3 実体修飾描写 -(r)uとの組合せ

「の」で構造上の2実体を結びつけて描写する際に、実体修飾描写(4.2 2)参照)を組み合わせることがある。

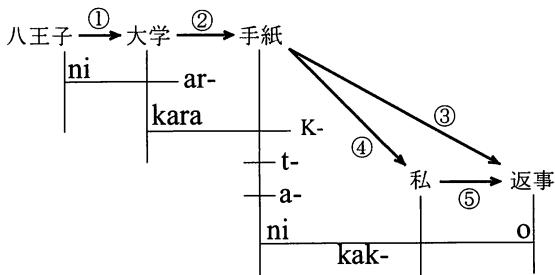
図36-1において、⑤の「の」を使用すると

私の返事

という形式で描写できるが、このとき、kak- をノ後名詞である「返事」に「実体修飾描写」すると、こうなる。

私の kak-u 返事

(このとき「私の」はあたかも「主語」のように見えることになる。)

図36-1
(再掲)

このような形で、次のようなものが可能である。

逆方向の① 大学の ar-u 八王子

逆方向の② 手紙の k-i=t-θ=a-θu 大学

③ 大学からk-i=t-θ=a-θu 手紙の 私の kak-u 返事

④ 手紙の k-i=t-θ=a-θu 私

逆方向の④ 私の 大学からk-i=t-θ=a-θu 手紙

⑤ 私の kak-u 返事

「の」がつなぐことのできる関係、実体修飾描写を伴うことのできる関係、の両者について、今後構造的観点から明らかにしてみたい。

36.4 ノ後名詞の省略

鈴木さんの靴はこれですね。ええと、私のは……、あっ、ありました。

ここに使用されている「私の」という形式は、「私の靴」を意味している。

構造図示すれば図36-5のようになる(属性 hak- は他のものでもよい)。

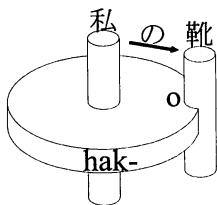


図36-5

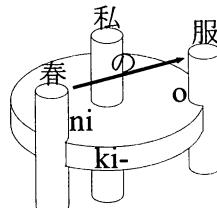


図36-6

「私の」が「私の靴」を意味するのは、話者も聞き手も図36-5のような構

造を共に内蔵しているときで、そのような場合にノ後名詞(靴)が省略できる。

このノ後名詞の省略されたことを示すために、次のような形で \emptyset を補うことにする。

私の \emptyset (は、ここにありました)

同様に図36-6からは「春の \emptyset 」を描写することができる。

(早く) 春の \emptyset (を準備しなくちゃ)

36.5 ノ後実体を含む「の」

ここまででは「の」が二つの実体(名詞)をつなぐ機能をもつものであり、矢印で示すことができるものとして考えてきた。そして、ノ後名詞が何であるか話者と聞き手にとって自明である場合には、そのノ後名詞が省略描写される場合もあると考えた。確かにそう考えるのがごく自然である場合がある。

しかし、「の」描写は、ノ後実体が必ず存在することを前提としているのだから、「の」はすでにノ後実体の存在まで含意しているのだと、積極的に一步を進めることもできる。特に描写においてノ後名詞が省略された場合には、「の」は単に矢印であるばかりでなく、ノ後実体をも含んでいるものとみることが可能である。(ただし、ノ後実体が「靴」であるとか「服」であるとかということまでは特定しない。単なる形式としてのノ後実体である。)

そう考えると、構造図示においては、図36-7,-8のように、「の」は矢印とノ後実体の両方を含むものになる。「つなぎ描写」の要素(矢印)と「実体の存在を表す」要素の両方をもつのである。

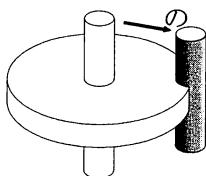


図36-7

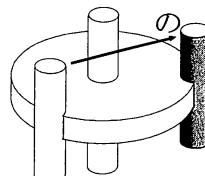


図36-8

私 の \emptyset (がありません) (図36-7)

春 の \emptyset (が一着ほしい) (図36-8)

36.6 矢印をはずされた「の」……形式実体E「の」

ノ後実体を取り込んだ「の」は、「つなぎ描写」の要素(矢印)と、「実体の存在を表す」要素の2要素を含んでいる。

後者の「実体の存在を表す」要素は非常に便利なものである。特に何と特定することなしに実体の存在が示せるからである。いわば無名の実体を使うことができるるのであるから、とりあえず何か実詞(名詞)が必要だというときに使用できるのである。

日本語にはこのような便利な無名の実体はほかにない。そこで、この要素だけを取り出して生かす道が開かれた。「の」から「つなぎ描写」の矢印がはずされたのである。

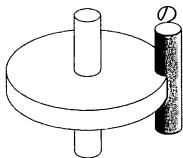


図36-9

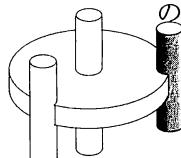


図36-10

こうして無名の実体「の」が誕生した。普通の実体ではない。そこに何かある一つの実体が存在することを表す、いわば形式だけ、機能だけの実体である。仮に置く実体である。中身の入っていない空のプラスチックの器、あるいは影武者といつてもよいであろう。この無名の実体を「形式実体E」と名付けることにし(6.1参照)，簡単に「ノ形式実体」と呼ぶことにする。

ここで一つの疑問が想定できる。無名の実体なのになぜ「の」という名前がついているのか。……その疑問にはこう答えよう。「の」は実体の「名前」なのではなく、普通の実体の代わりに仮に置かれる空の器としての「機能」を表しているのであって、「の」は機能名なのである、と。

36.7 ノ形式実体(形式実体E「の」)は修飾されねばならない

このノ形式実体は機能だけのものだから、それ自体は何らの属性ももたない。それで、単独では主語や客語として描写することはできない。

*のが来た。 (図36-11)

*のを食べた。 (図36-12)

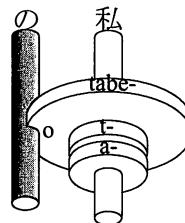
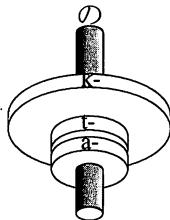


図36-11 文としては描写できない 図36-12

「の」が属性をもつためには、代置されている元の普通の実体がどんなものであるのかを示さなければならない。そのためには「の」は修飾によって特定化されなければならない。

(図36-11, -12でも「来たの(は～)」「私が食べたの(は～)」のように「の」を修飾する形では描写できる。しかし、これでは文としてではなく、句としての描写にとどまる。)

修飾には、①動属性による修飾、②実体つなぎによる修飾、③形容属性による修飾、④な基による修飾がある。一つずつ検討してみたい。

① 動属性による修飾

私たちが乗る(nor-u)のが来た。 (図36-13)

妹が作った(tukur-i=t-Ø=a-Øu)のを食べた。 (図36-14)

図36-13では「私たちが乗る」という修飾を受けた「の」が、何か乗り物である元の実体に代置されているのだということが分かる。こうなって初めて実体(主体)として扱うことができるようになる。

図36-14でも、「の」は「妹が作った」という修飾を受けてはじめて実体として「食べる」の客体になることができる。

「乗る nor-u」が修飾力をもつのは下線部の実体修飾描写詞(図示では矢印になる)のためである(4.2.2参照)。「作った tukur-i=t-Ø=a-Øu」の場合も同様であるが、こちらは実体修飾描写詞がゼロ化している(ただし、古くは

「作りたる tukur-i=t-Ø=ar-u」で顕在していた)。

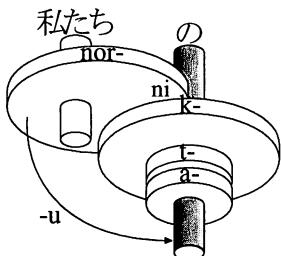


図36-13

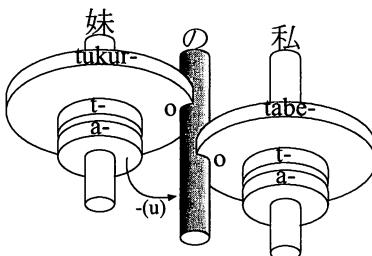


図36-14

② 実体つなぎ「の」による修飾

図36-13, -14において、また、実体つなぎ修飾(ノつなぎ、36.1参照)を施すこともできる。

私たちののが来た。(図36-13)

妹のを食べた。(図36-14)

この実体つなぎ修飾により、形式実体E「の」は、「私たち」あるいは「妹」と関連する何かの実体に代置されているものであることが分かる。

しかし、このようなノ形式実体への実体つなぎは、次のように属性による実体修飾描写(①③④参照)を伴うのが普通である。

私たちの 乗るのが来た。(図36-13)

妹の 作ったのを食べた。(図36-14)

もっとも、ノつなぎだけでも自然なものもないことはない。

うちののもピーマンが嫌いで……。

これ、君のに入れといて。

③ 形容属性による修飾

うるさいのが来た。(図36-15)

大きいのを食べた。(図36-16)

「うるさいの」では「の」が何か騒音を立てる属性をもつ実体に代置され

ていることが分かり、「大きいの」では「の」が何か他に比べて質量のまさる属性をもつ実体に代置されていることが分かる。

「うるさい urusa. k-i」が修飾力をもつのは下線部の実体修飾描写詞(図示では矢印)のためである(8.2参照)。「大きい ooki. k-i」の場合も同様である。

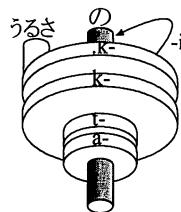


図36-15

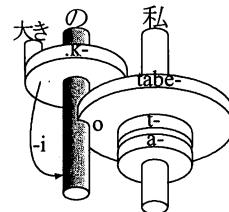


図36-16

④ な基による修飾

にぎやかなのが来た。(図36-17)

小ぶりなのを食べた。(図36-18)

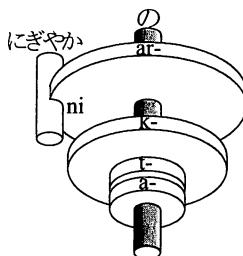


図36-17

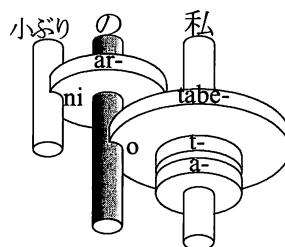


図36-18

「な基」については11.3で扱っている。

「にぎやかなの」では「の」が何かうるさいほど陽気であるという属性をもつ実体に代置されていることが分かる。「小ぶりなの」では何か他に比べて多少小型であるという属性をもつ実体に代置されていることが分かる。

36.8 形式包含実体としての「の」……ノ包含実体

36.6～7でみた「の」は、属性とは格関係にあり、普通の実体に代置される形式実体であった。

この便利な「の」は、機能を拡大し、構造を包含して、構造を実体(名詞)化する機能をもつようになった。包含実体「の」の誕生である。17世紀ごろのことであるらしい。ここに誕生した包含実体「の」を「ノ包含実体」と呼ぶことにする。

図36-19, -20は

彼女が歌を $uta(w)$ -u の を kik -

という構造である。ノ包含実体は「彼女が歌を $uta(w)$ -」という構造を内蔵し、その構造の修飾を受けるという形でその構造を実体(名詞)化している。

36.6～7での非包含実体としての扱いと異なり、包含実体としての「の」は属性($uta(w)$ -)と格関係がない。

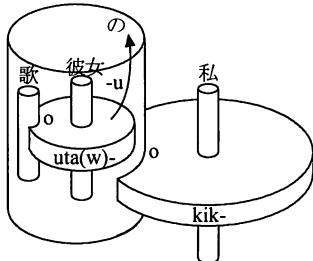


図36-19

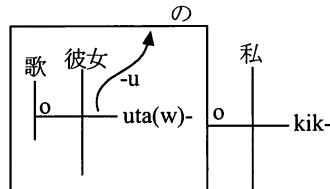


図36-20

包含実体には「こと」や「もの」等多数のものがあるが、ノ包含実体「の」はそれらの包含実体とは大きく異なっている。「こと」や「もの」等はもともと実詞(名詞)であり、すでに意味をもっていた。ところがこの「の」は、意味をもたず、実体としての機能だけをもち、単に構造を実体化するだけの存在である。そこで、このノ包含実体を他の包含実体と区別して「形式包含実体」と呼ぶこととする。

特定の意味を付与せずに構造を実体化する。これが形式包含実体「の」の特徴であり、大きな利点である。

36.9 ゼロの包含実体「θ包」と形式包含実体「の」

6.6でゼロの包含実体「θ包」に言及した。「θ包」は名前のない包含実体で、意味をもたない。構造を、何らの意味も付与せずに、そのまま実体(名詞)化することができる。この点では、実体化の機能だけをもつ形式包含実体「の」とよく似ている。

現在では両者ともに使用されるが、格との関係での使用可能性をみると、歴史的に古い「θ包」には大きな制約が生じている。歴史的に新しいノ包含実体には若干の制約があるのみである(表36-1参照)。

なお、ことわざ等、古典語的な言い方で固定しているものについては検討の対象外とする。

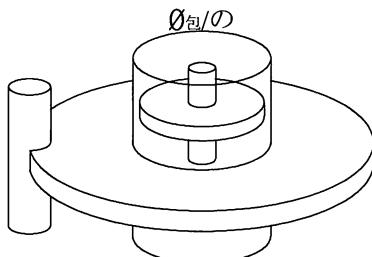


図36-21 主格にある「θ包」「の」

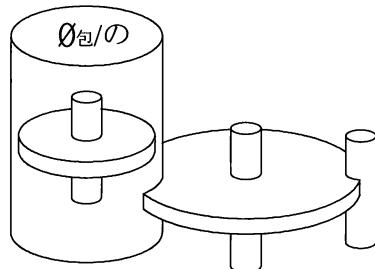


図36-22 客格にある「θ包」「の」

① 「θ包」の使用制限

「が格」での使用は忠告(～がいい)に限られる。

そんなことはしない θ包 が いいよ。

「を格・へ格」では使用できない。

*彼に言う θ包 を 忘れた。

*犬が走る θ包 へ ボールを投げた。

「に格」での使用は「は・も」などの相対化描写が必要。また、基構成。

彼に会う θ包 に は 予約がいる。

彼が行く θ包 n=ar-a(ba) 私も行く。

「で格」での使用は基構成の場合がほとんど。

*彼が帰る θ包 で 玄関先まで見送った。

◎形式断定基、いです基等の基を構成する。

「と格(引用を除く)・より格・まで格」での使用ではθ包内はル形のみ。

右へ曲がる θ包 と コンビニがある。

山へ行く θ包 より 海へ行きたい。

彼が来る θ包 まで 待っている。

◎引用の「と」はタ形も可。「もう着いた θ包 と 思います。」

「から格」での使用は特に制限なし(本章末参照)。

雨が降る θ包 から 傘を持って出る。

表36-1

<u>θ包</u>	「の」(ノ包含実体)	+格
「～がいい」のみ可	○	+主格
×	○	+を格
相対化描写で可・基構成	○	+に格
×	○	+へ格
基構成	○	+で格
引用以外はル形のみ可	○	+と格
ル形のみ可	○	+より格
○	×	+から格
ル形のみ可	×	+まで格

② 「の」(ノ包含実体)の使用制限

「から格・まで格」では使用できない(後述参照)。

*晴れる の から 傘は必要ない。

*雨がやむ の まで ここで待っている。

◎「彼が優勝した の まで は知らなかつた。」

この「まで」は格詞ではなく相対化描写詞なので対象外。

その他の格では特に制限はない。

彼女に会う の θ₁ は 初めてだ。

稻妻が走る の を 見た。

客が来た の に 気づかなかつた。

子どもたちが大玉を転がして行く の へ 声援を送った。

花が咲いた の で 見に行った。(37. 2①)

卒業する の と 結婚するのが同時だった。

ここで釣る の より, あそこで釣る方がよい。

以上は表36-1のようにまとめることができる。

◎ 「から・まで」は上のように格詞としての「から・まで」のように考えることもできるが、包含実体に関わる場合は、共にノ包含実体の使用ができないことと、「(が・)に」格詞を続けることができることから、包含実体としての「から・まで」として考えるべきかもしれない。その場合は包含実体が「に格」あるいは「 θ_2 格」(及び「が格」)に置かれたものとして扱う。

「から」…… 見る から に 強そうだ。

そんなことを言う から に は、覚悟があるのだろう。

これはおいしい から θ_2 食べなさい。

「まで」…… ここに来る まで が たいへんだった。

会議が始まる まで に 仕上げる。

彼がもどる まで θ_2 ここで待つ。

第37章

「の」 諸題

37.1 「のだ基」「のです基」

①「ノ包含実体」は水のように無味無色透明……無意味

飲み物にはいろいろなものがある。ビール、ワイン、清酒、リンゴジュース、オレンジジュース、コーラ、ミルク……。それぞれに個性がある。しかし、水はどうだろう。無味無色透明、個性のないのが個性となっている。

水は、アルコールが必要な場合には役に立たない。カルシウムが必要な場合にも役に立たない。しかし、そのような条件がなく、ただ渴をいやすためであれば、ジュースやコーラの代用にはなるだろうし、そもそも水が一番だという場合さえある。水は最も基本的な飲み物である。

包含実体にもさまざまなものがある。「とき」「まえ」「あと」「こと」「もの」「わけ」「はず」「ため」……。それぞれに意味がある。これらの包含実体の中にあって、「の」すなわち「ノ包含実体」は、形式だけをもち、意味をもたないのが特徴である。ノ包含実体は最も基本的な包含実体であり、飲み物における水のような位置にある。

②「ノ包含実体」の意味は、他の構造との関係の中で生じる

ノ包含実体は時の関係を表すことはできない。空間の関係も表すことはできない。しかし、構造を、そのような特定の意味を与えるのでなしに実体化するのでよければ、意味のないぶん汎用性が高く、非常に便利に使うことができる。ノ包含実体の意味は、ノ包含実体が他の構造に組み込まれてから、他の構造との関係の中で形成される。

③ 構造の包含実体化は、他の構造との関係づけを指向

たとえば、ここにこういう構造があるものとしよう。

あしたは学校へ行く (図37-1)

この構造はこのままではこれで完結してしまうが、

あしたは学校へ行くの (図37-2)

というふうにノ包含実体に入れられたとすれば、この構造は他の構造と関係づけられる権利・可能性を得たことになる(6.4)。

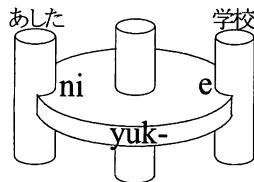


図37-1 あしたは学校へ行く

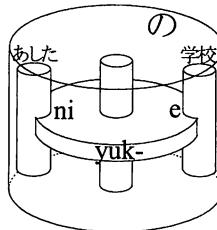


図37-2 あしたは学校へ行くの

④ 「ノ包含実体」が他の構造との関係においてもつことになる意味

実際、これを他の構造に組み込めば、大きな構造の一部となる(図37-3)。

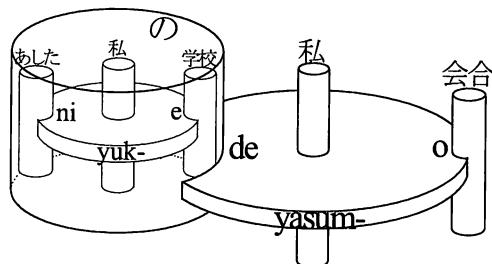


図37-3 あしたは学校へ行くので会合を休む

ノ包含実体のもつ意味は、組込先の構造との関係から生じる。この例では「理由」の意味が生じている(37.2 「ので基」参照)。

同様に、組込先の構造との関係のあり方によって、たとえば次のようなさまざまな意味が生じる可能性がある。

ただし、以下の()内の構造の形成は、話者の深層でのできごとであり、

話者がこれほど明確に意識するわけではない。話者はただ、ノ包含実体が何らかの他の構造との関係において存在していることを意識するにすぎない。したがってここに生じる意味は客観的な論理的な性格のものであるよりは、話者の主体的な認知を反映したものである性格が強く、聞き手がその認知を共有していることはないだろうという前提がある。(それで、独り言など、聞き手がその認知を共有している場合には不自然になる。)

[理由] あしたは学校へ行くの (で、海へは行けない)

[原因] あしたは学校へ行くの (で、母が喜んでいる)

[結果] あしたは学校へ行くの (が、思案のうえの結果となった)

[予定] あしたは学校へ行くの (が予定になっている)

[希望] あしたは学校へ行くの (が希望だ)

[決意] あしたは学校へ行くの (が私の決意だ)

[主張] あしたは学校へ行くの (が当然だ)

[自慢] あしたは学校へ行くの (で、自分をほめてやりたい)

[忠告] あしたは学校へ行くの (がよい)

[命令] あしたは学校へ行くの (を命じる)

[事実] あしたは学校へ行くの (は事実だ)

[実情] あしたは学校へ行くの (がほんとうのところだ)

意味関係はこれですべてというものではないであろう。が、ともかくこの

あしたは学校へ行くの

はこのままの形で(特に女性や年少者によって)発話されることもある。イン
トネーションにより疑問文として発話されることもある。

⑤「のだ基」「のです基」

文章表現での場合やふつうの発話では、このノ包含実体を含む構造(図37-3)が形式断定基(11.4)の中に入れられて、「だ・です」を伴い、通常の文の体裁をとることが多い。(「だ・です」等の構造については 11.1 参照。)

あしたは学校へ行くの だ／です。

構造は図37-4のようなものとなる。

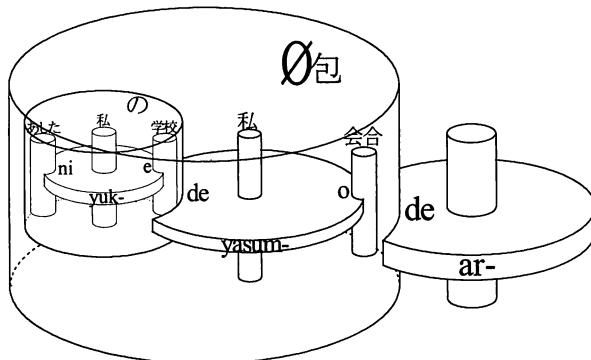


図37-4 あしたは学校へ行くのだ／のです

ここに現れる構造をいわゆる「のだ・のです」の構造とみると、ここから、「のだ基」「のです基」を抽出することができ、それは図37-5に示すようなものとなる。

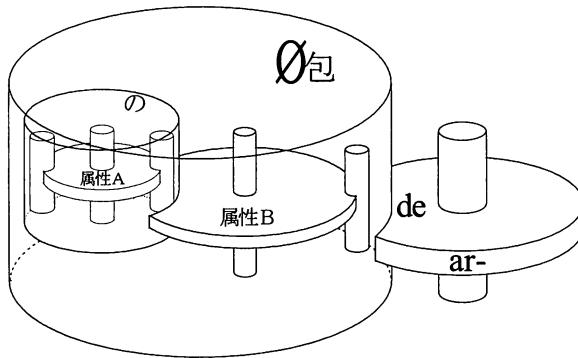


図37-5 「のだ基」「のです基」の例

この基での描写の公式は

属性A の だ／です

となる。

ノ包含実体が関係をもつ属性Bは描写されない。属性Bが描写されないので、属性Bとの関係からノ包含実体に生じるはずの意味は、状況等から推測するしかない。それで、ここに含蓄の深みが生じ、それが情緒という形での

印象になったりもする。

これはたとえば次のように表現することもできるだろう。

[理由] あしたは学校へ行くの（で、海へは行けない）だ／です。

[予定] あしたは学校へ行くの（が予定になっている）だ／です。

[決意] あしたは学校へ行くの（が私の決意だ）だ／です。

[忠告] あしたは学校へ行くの（がよい）だ／です。

[実情] あしたは学校へ行くの（がほんとうのところ）だ／です。

明示されない（ ）内の構造が、含蓄・情緒という形での印象になる。

なお、（ ）内が明示されて（下線部）、より大きな構造になることもある。

あしたは学校へ行くの で、海へは行けないの（が本当のところ）です。

この場合は、[理由] の意味が明示されることになり、[実情] の意味が含蓄・情緒の印象となる。

また、

村田さんは日光だ

のような形式断定基の構造そのものが「のだ基」に入って、

村田さんは日光なのだ

のような形式になることもある。このような場合の構造図示については図11-27(第11章)参照。

⑥「おいしいです」と「おいしいのです」

たとえば、

おいしいです。

は一つの構造であり、これで完結している。味について述べている。

これが「のです基」に入って、

おいしいのです。

となると、単に味について述べる形式ではなくなる。

「おいしいです」がノ包含実体の中に入り、属性Bとの関係に置かれるこ

とにより、構造Bとの間に何らかの意味関係が生じる。しかし、属性Bが描写されないので、その意味関係は推測するしかない。それで、含蓄の深みや情緒を感じさせたりすることになる。

「おいしいのです。」は、他の構造との関係において(37. 1③④)味について述べることになるので、

たくさん食べていることの理由の説明

としての味への言及であったり、

自分が相手にその飲食物を勧めることの理由の説明

値段が高いことの理由の説明

A子が作る料理がおいしいことの主張

自分が作る料理がおいしいことの自慢 等々

としての味への言及であったりもする。

37. 2 「ので基」「のに基」

① 「ので基」

形式包含実体「の」は、他の包含実体「もの」や「こと」等と異なり、
特定の意味を付与することなしに構造を実体化する
ことができる(36. 8)から、ある構造をそのまま実体化しようとする場合にこの「の」が使用される。

雨が hur-

という構造があれば、「の」によりこのまま実体(名詞)化することができる。

雨が hur-u の

ここにできた実体を「で格」のうちの「原因・理由」を表す格に置いて、
その構造(雨が hur-)が「原因・理由」を表すようにする形式が「ので基」
(図37-6)である。

たとえば次のような文の構造は図37-7のような形になる。

雨が hur-u の で 家にいる

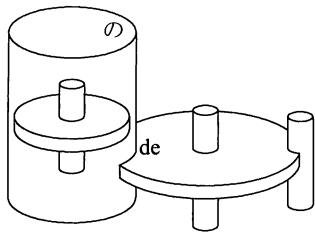


図37-6 「ので基」の例

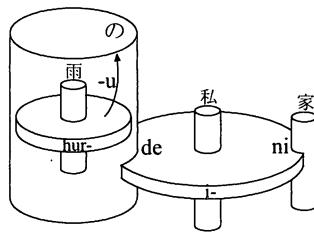


図37-7 雨が降るので家にいる

意味的に「ので基」に似たものに、包含実体「から」「ため」がある。

雨が hur-u から⁰² 家にいる

雨が hur-u ため(に) 家にいる

この両者はともに元来実体(名詞)であり、その実体そのものが原因・理由を表している。つまり、この点で「ので基」とは事情を異にしている。

「ので基」では、原因・理由を表すのは「で格」という位置であり、ノ包含実体そのものは原因・理由を表すものではない。

ノ包含実体は、構造を関係の中に置こうとしているだけである。

② 「のに基」

ノ包含実体を「に格」のうちの「逆接的状況」を表す格に置いて、その構造が「普通に予期する事象と逆の事象が生起すること」を意味するようになる形式が「のに基」(図37-8)である。

たとえば次のような文の構造は図37-9のような形になる。

雨が hur-u の に 山へ行く

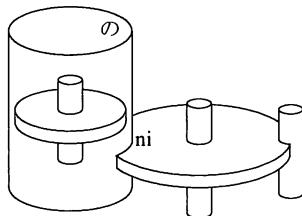


図37-8 「のに基」の例

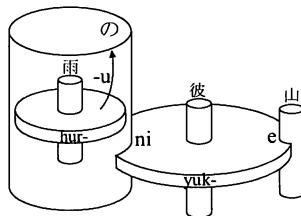


図37-9 雨が降るのに山へ行く

37.3 「魚のおいしいの」の構造

「魚のおいしいの」というタイプの表現がある。これは「魚」という名詞をまず提示して、その後でそれに修飾を加えてから主語や客語として扱おうとする表現である(「魚の／おいしいの／がある」)。このような表現の構造はいったいどのような形になっているのだろうか。

36.2において、名詞の後に「の」があったら、「の」の前に格を補うといい、というアドバイスをした。

魚のおいしいの

という形式の「魚の」はまさにこのケースである。この形式の描写される元になっている構造を知る手がかりは、名詞(魚)の後ろ、「の」の前にどんな格が可能であるかを知ることにある。

その位置に(θ_1 格と θ_2 格を除く)すべての格を候補として取り上げて並べてみる。

魚(が・を・に・へ・で・と・から・より・まで)のおいしいの

すると、意味的に可能性があると思われるのは「が」と「で」であるということが分かる。

① 魚がのおいしいの

② 魚でのおいしいの

一方、「おいしいの」の構造は、36.7③から、図37-10のようであることが考えられる。この「の」は形式実体である。

「魚のおいしいの」の「魚の」の「の」は、「魚」から形式実体「の」に向かう矢印(つなぎ描写)，すなわち描写詞であると考えられるので、構成構成に必須のものではない。そこで、①②からこの「の」をはずすと、次のようになる。

①' 魚がおいしいの(を買う)

②' 魚でおいしいの(を買う)

①' は不自然である。②' は可能である。それで、②' の「魚でおいしいの」の構造を考えればよいことになる。

「魚でおいしいの」の「の」が「魚」を意味していることはまちがいないから、この「で」格は「の」と「魚」が同一のものであることを示す格(同定格)であると考えられる。つまり、「魚であるの」という構造があるはずである。この構造を図示すれば、図37-11のようになる。この構造からは「魚(でのの)」という描写が可能である。

この構造と、すでにできていた図37-10の構造を組み合わせると、図37-12のような構造を得ることができる。これがすなわち

魚のおいしいの
の構造である。

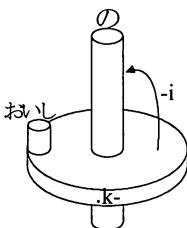


図37-10 おいしいの

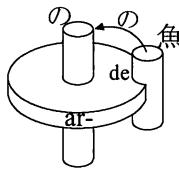


図37-11 魚のの

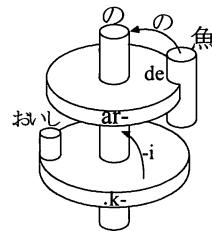
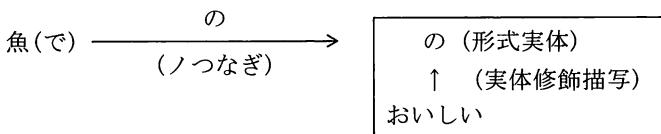


図37-12 魚のおいしい

の

この構造(図37-12)の修飾関係は次のように示すことができる。



「魚のおいしいの」という構造は、同時に

魚でおいしいの

魚であるおいしいの

と描写することもできる構造なのである。(意味は似いてても、「おいしい魚」「魚がおいしい」の構造とは異なっている。)

これと同じような構造をしているものの例をいくつか挙げておく。

試験問題の <u>むずかしい</u> の	(形容属性使用)
学生の <u>福岡から来た</u> の	(動属性使用)
ジャズの <u>にぎやかな</u> の	(な基使用)

37.4 「カラオケに行くの巻」の構造

たとえば、このような文がある。

芸能人と結婚するの望みあり。

この文で文法上疑問となるのは、「結婚する」はこのまま「望み」を修飾することができる(「結婚する望み」)のに、なぜ「の」が介在しているのか、ということである。

同じような表現として「いにしえを懐かしむの情」「あざむかざるの記」「その部屋に入るの瞬間」「カラオケに行くの巻」など、さまざまなものを考えることができる。

このような「の」はどう考えればよいのだろうか。どう構造図示すればよいのだろうか。

『日本文法大辞典』「の」の項の「補説」によれば、

「あざむかざるの記」のように、用言の連体形をうける用法は、漢文の訓読から生じたものである。

という。その説明に従えば、

終食之間

という漢文は「之」を読まずに、「ショクヲ・ヲフル・ヒマタ」でよいはずなのだが、

室町中期以後、朱子新注学を奉ずる人々により、漢文の字面を離れても置字のあることがわかるようにとの配慮から

從来不読の置字であった助字「之(ノ)」が読まれるようになり、それで、

ショクヲ・ヲフル・ノ・ヒマタ

というように、この「の」の用法が生じたのである、という。

では、この日本語としては変則的な「の」は、構造図示ではどのようなも

のになるのだろうか。

① まず、たとえば、

壁に張るの絵

のように、名詞(絵)が属性(張る)と格関係(を格)にある(絵を張る)場合についてはこうなるだろう。

本来は図37-13のように、実体修飾描写詞は「-(r)u」の形式でよいのであるが、余分な「の」を伴うことになったので、図37-14のように「-(r)uの」の形式とするのが妥当であろう。



図37-13 張る絵

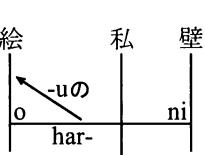


図37-14 張るの絵

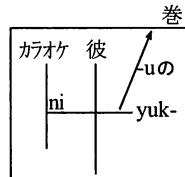


図37-15 行くの巻

② 一方、たとえば、

カラオケに行くの巻

のように、名詞(巻)が属性(行く)と格関係にない(巻?行く)場合は包含実体構造となるのであるが、この場合でも、本来「-(r)u」のみでよい実体修飾描写が余分な「の」を伴うことになったので、図37-15のように「-(r)uの」の形式とするのが妥当であろう。

日本語では属性(動詞等)を「-(r)uの」という形で描写すると、それですでに特殊な実体(名詞)であるノ形式実体(36.7①)や、ノ包含実体(36.8)になってしまう。だから、これで別の実体を修飾しようとすると不自然になるのである。

*私が読むの 本

*おもしろいの 映画

*静かなの 部屋

しかし、もちろん、これをノ実体として扱う限りは問題がない。

私が読むの がない。おもしろいの から見る。静かなの を聞く。

①②いずれの場合にも「-(r)uの」を実体修飾描写詞として使用することは、日本語としては変則的なことなので、漢文調にするなどの特殊な表現効果をねらう場合にのみ使用される。

以上のように、構造図示においては実体修飾描写の矢印に「-(r)uの」を添えたものとするのが妥当であろう。

37.5 強調構文の構造

強調構文と呼ばれる文の形式がある。この構文にはA, B 2種類のものが想定できる。

① 強調構文 A……実体の特定

たとえば、

彼がUFOを見た。 (図37-16)

という文がある場合、この文の中の特に強調したい実詞(名詞)を取り出して、次のような形式にしたもののが強調構文である。

[彼] UFOを見た の は 彼だ。 (図37-17)

[UFO] 彼が見た の は UFOだ。 (図37-18)

構造図を示せばこうなる。

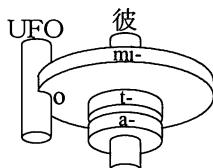
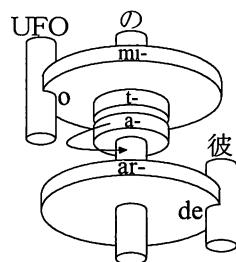
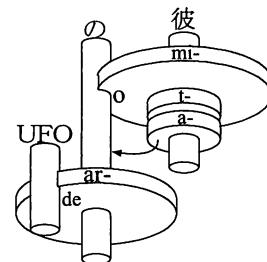


図37-16



UFO o miretai no waかれ da

図37-17



UFO o miretai no wa UFO da

図37-18

図37-16のようなもとになる構造の中の強調すべき実体をノ形式実体に置き換える、そのノ形式実体を属性 ar- の主体とし、強調すべき実体を ar- の

de格(同定格)に置く。このような形で強調構文Aの構造が作られる。この構造を強調構造Aと呼ぶ。

なお、疑問文の場合は、強調される実詞が初めに描写されることがある。

彼？ U F O 見たの。 / U F O ? 彼が見たの。

② 強調構文B……格つき実体の特定

たとえば、

彼がソウルから帰った。 (図37-19)

という文の「ソウル」を強調すべき実体として、強調構文Aとしての扱いをしたとすると、

彼が帰った の は ソウルだ。

となる。ところが、これは、

彼がソウルへ帰った。

の強調構文Aでもあります。ここには二義、あいまい性が生じている。

この二義性を避けるために、強調構文Bが用いられる。強調構文Bは強調構造Bから描写されるのであるが、強調構造Bというのは、図37-20のように、同一の構造(図37-19)から「ノ包含実体」と「θ包」の二つの包含実体を作って、ノ包含実体を属性 ar- の主体とし、θ包を「de格(同定格)」に置いた構造である。

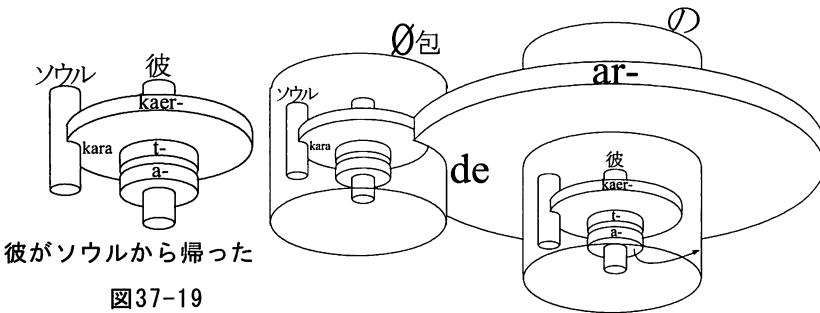


図37-20 彼が帰ったのはソウルからだ

それぞれの包含実体内の「異なる部分」を描写することによって強調の構

文を作る。そこで、

彼が帰ったの は ソウルから包 だ。

という文が描写できる。この描写では実詞(名詞)に格詞を添えることができるので、上にみた二義性を回避することができる。

強調構文Aとの違いを改めて示せば、強調構文Aで

ソウルから帰った の は 彼だ。

となるところが、強調構文Bでは

ソウルから帰った の は 彼がだ。

となる。このように、強調構文Bでは、実詞に格詞を添える形が可能になる。

なお、疑問文では強調される(格詞つき)実詞が初めに描写されることもある。

ソウルから？ 彼が帰ったの。

以上の強調構造Aと強調構造Bの相違点を表にすれば表37-1のようになる。

表37-1

	強調構造A	強調構造B
の	ノ形式実体	ノ包含実体
強調部	実体	実体+格

37.6 「自由の女神」と「自由な女神」

「自由の女神」と「自由な女神」はどういう関係にあるのだろうか。構造と描写の関係で考えてみたい。

「自由の女神」は「自由」と「女神」が「の」で結ばれているのだから、両者が同一構造の上にあることを示している。たとえば、「女神の、人間に自由を与える」(図37-21), 「女神の、自由を守る」(図37-22), 「女神の、自由を好む」(図37-23), 「自由の、女神を愛する」(図37-24)などのいずれの構造からも「自由の女神」が描写できる。

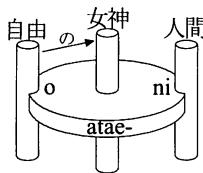


図37-21

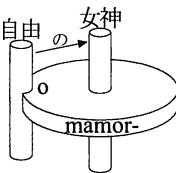


図37-22

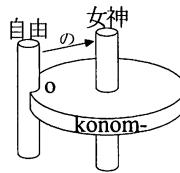


図37-23

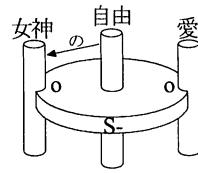


図37-24

はなはだしい例では「女神の自由がない」(図37-25)からでさえ「自由の女神(自由のない女神)」が描写できる。当然「女神の自由がある」(図37-26)からも「自由の女神(自由のある女神)」が描写できる。

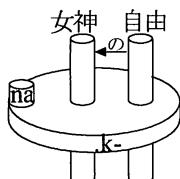


図37-25

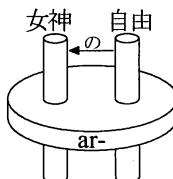


図37-26

固有名詞としての「自由の女神」は、アメリカのリバティ島に100年以上立ち続けている女神像をさすわけで、この女神像の場合はたぶん「女神の自由を与える」とか、「女神の自由を守る」とかという構造からその名称をとったものと思われる。しかし、確実なところはわからない。とはいえ、「女神」が「自由」と何らかの形で関連しているということだけは確実である。

「の」が使用されている場合には、このように、その背後にどのような構造があるのかは、正確には知りがたい(36. 1, 2)。したがって、意味も推測するしかない。

一方、「自由な女神」は「女神」が「自由にある」という構造(図37-27)だけから描写でき、意味は一義的である(11. 3参照)。もちろん、この構造からも「自由の女神」が描写できる。

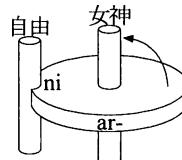


図37-27 自由な女神

そこで、こういうことになる。

「自由な女神」は「自由の女神」であるということができるが、「自由の女神」は「自由な女神」であると限定することはできない。限定できないどころか、意味的にはほとんど別のものである。(ところが「自由の人」となると、「自由な人」とかなり近くなってくる。) 「自由の女神」はさまざまな構造の可能性をもっている。

同様に「静かな海」と「静かの海」の対照がある。「静かな海」(図37-28)は「静かにある」という海の状態を伝えているが、「静かの海」(図37-29)では「静か」と「海」が何らかの関係をもっていることをいうにすぎず、海が静かな状態にある、ということを伝えようとしているとは限らない。では、何を伝えようとしているのか……それは、この句に接する人が自分で推測するしかない。

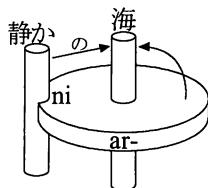


図37-28 静かな海

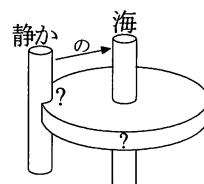


図37-29 静かの海

37.7 「この・その・あの・どの」の構造

「この」の類の構造をどう表せばよいのかについて考えてみたい。

「この」は「こ」と「の」から成り立っている。これはたとえば「これの」の省略形であるかというと、そうではなく、もともと「この」の形であったようである。築島『講座国語史4 文法史』(p. 163)にこうある。

記紀歌謡では総て「コノ」である。恐らく「コレノ」は「コノ」に対して新しい形であって……(略)……

では「こ」は何かというと、大野ほか『岩波古語辞典』によれば「これ・ここ」という意味をもつ代名詞である。「の」は実体つなぎ描写詞(4.2.3))

である。とすれば、たとえば「この花」というのは、図37-30のような構造で考えることが可能である。ただし、現代語ではこの構造をこのまま「ここにある花」と描写することはない。「この」は基であると考えられる。

「その」についても同様に考えることができ、構造図示は「この」の「こ」を「そ」に置き換えればよい。

「あの」は若干事情が異なり、「この・その」と同様に考えることができるのは「かの」という古い形である。それで、構造図示において、「この」の「こ」に置き換えるべきものは「か」である。しかし、すでに平安時代に「かの ka-no」から k 音が脱落して「あの a-no」へと変化していることでもあり、一応このことをふまえた上で、「か」に代えて「あ」を使用することにする。

「どの」の「ど」も、元来「いづく」であるが、このことをふまえた上で、同じ扱いとすることにする。ただ、「どの」は疑問詞であるので、形式実体 A、すなわち属性盤に開いた穴となる(6.2)。(図37-31)

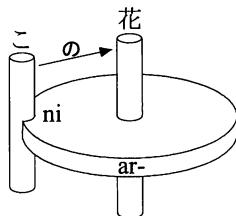


図37-30 この(その・あの)花

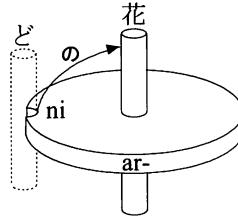


図37-31 どの花

たとえば「この花をください。」という文は図37-32の構造となる。

◎ この文の「ください」の部分は、鈴木ほか『日本文法講座8 助動詞Ⅱ』p. 185 によれば、「『くだされ』の音転とみるほか、『くださいませ』の下略とみる説もある」ということなので、ここではより妥当性が高いと考えられる後者をとり、

kudasar-i=mas-e (くださりませ、くださいませ)

の「ませ」の省略(及び r 音の脱落……A3.8)を考えることにする。

kudasar- の内部構造そのものについては39.6参照。

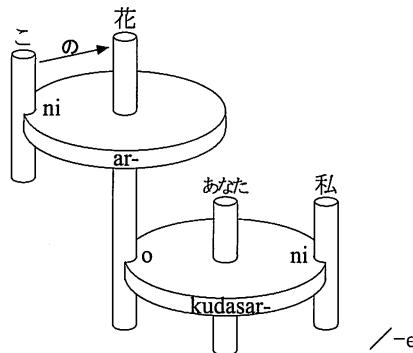


図37-32 この花をくださいませ
(助動詞「mas-」は「kudasar-」の下に隠れていて見えない。)

ちなみに、「こんな」の構造を示しておきたい。「こんな」は「これなる」の変化形と考えられるので、図37-33のようになる。（「そんな・あんな・どんな」も同じ扱いとする。）

次のような音変化と考えられる。

kore-ni=ar-u	(これにある)
kore-n =ar <u>-u</u>	(これなる) i音脱落
kore-n =a -θ	(これな) ru拍脱落
kon -n =a -θ	(こんな) r-V-n変音

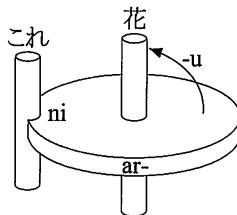


図37-33 こんな花

(もし「こんな」が「このような」の変化形だとすると、「このように」という意味で「こんに」という形ができるはずである。)